

ネパールの子どもたちと 絵を交換しよう

7月初旬、東京の暑さから逃れるように、北海道帯広市に向かった。空港を出ると、ふんわり涼しい風がほおをなでる。十勝平野の中心部に位置し、農業や畜産業が盛んなこの町。市内行きのバスの車窓からは、一面に田んぼや牧草地が広がっている。その空間を包み込む真っ青な空に、思わず圧倒される。

市街地からバスで約30分、緑豊かな稲田の杜に囲まれた、帯広市立稲田小学校に着いた。体育館に入ると、何だか落ち着かない様子の児童たちが。そう、この日の4〜5時間目はちよつと特別。つい10日前に帰国した青年海外協力隊OB・吉岡幹人さんが、ネパールについて授業をしてくれるのだ。数力月前から、4〜6年生は皆、この日を待ちわびていた。

吉岡さんと稲田小の出会いのは約2年前。現在、4年生を受け持つ越智卓先生が、JICAの教師海外研修でネパールを訪問したことがきっかけだった。



今、僕たちにできることから始めよう

JICA教師海外研修で訪問したネパールを題材に、途上国が抱える問題について子どもたちに伝えてきた帯広市立稲田小学校の越智卓先生。異国の地に思いをはせることから、小さな国際協力の輪が広がっていく。



稲田小の子どもたちの前で、ネパールでの活動について話をする吉岡さん。彼をじっと見つめる子どもたちの瞳が印象的だった



各クラスの代表者による質問コーナーも。越智先生(右)もディスカッションに参加



環境教育の普及のため、ネパールで自ら作詞作曲した「あなたの好きな町」を弾き語りする吉岡さん。「自分の住んでいる大切な町をきれいにしてほしい」というメッセージが込められている

「世界の問題について教えるために、自分の目で現状を確かめておきたかった」。そんな思いから研修に参加した越智先生は、首都カトマンズのごみの多さに衝撃を受ける。「あちこちに空き缶や紙くずが散らばっている。何でこんなことが起こってしまうのかと、ただ不思議でした」。そんな中、視察先の小学校で、環境教育に取り組んでいたのが吉岡さんだった。「厳しい環境の中で、日本の若者が汗を流している姿に胸を打たれました」。一緒に何かできれば。そんな思いを胸に帰国した。

当日は給食も一緒に食べた4年2組と吉岡さん(中央)。ネパールの子どものことを思いながら、みんな残さず食べた



マは「自分の住んでいる町」。両国の子どもたちは、異国の地に思いをはせながら筆を走らせ、彼らの絵は海を渡った。

稲田小から贈られた絵は、雪だるま、エゾシカ、学校や近所のお店など、実にバラエティー豊か。どれも、ネパールの子どものたちにとって目にしたことのないものばかりだった。「絵を受け取った時、とにかくすごい盛り上がりでした。自分たちのために描いてくれたことがうれしかったのだと思います」と吉岡さん。一方、稲田小に届いたのは、お寺や仏像など神秘的な絵。「まさに神様を尊ぶネパールを象徴したものの。絵一つを取ってもまったくアイデアの違う、同世代の子に刺激を受けたようです」(越智先生)。

本当の幸せって何ですか？

こうして、海を越えて交流を続けてきた吉岡さんと稲田小の子どもたち。偶然にも、函館市出身の彼が帰国することを知った越智先生はこう思った。子どもたちに直接話をしてほしい。そんな強い願いから、この日の授業が実現した。

「ナマステー！」
吉岡さんがステージに登場すると、子どもたちから「わあっ」と歓声が起る。「ネパールに絵を贈ってくれてありがとうがとうございました」。その言葉に、子どもたちの顔がほころぶ。「本当に届



いていたんだ!」。そんな声が、あちこちから聞こえた。

これまでも、越智先生を通じて、ネパールについて勉強してきた子どもたち。しかし、「日本では毎日掃除の時間があるけど、ネパールには教室にごみ箱すらない学校もある」「家の手伝いが忙しくて、学校に行けない子もいる」といった吉岡さんの話を聞き、シヨックを隠しきれない様子だった。

「ネパールの人たちは幸せなんですか?」
一人の男の子が、こんな質問を投げ掛けた。
「僕の2年間を支えてくれたのは、ホームステイ先の家族の優しさです。ネパールでは、本当に家族のつながりが強い。幸せの形にはいろいろあることを知りました」



絵の交換を通じてつながった稲田小とネパールの子どものたち。お互いの国に興味を持つきっかけにもなった

そんな吉岡さんの熱いメッセージに、400人の児童がじっと耳を傾けていた。

4年生の長田奏祐くんは、「世界にはまだまだ知らないことがたくさんある。ごはんを残さないとか、ごみが落ちていたら拾うとか。身の回りのことから気を付けていきたいです」と力強く話してくれた。赤松萌鈴さん(6年生)は、母親が元協力隊員。「私もお母さんや吉岡さんみたいに、途上国の人のためになる仕事がいい」と目を輝かせた。

「ネパールと稲田小をつないでくれてありがとう!」
子どもたちの元気な声を背に、吉岡さんは体育館を後にした。今、僕たちができることを。この日を境に、稲田小の子どもたちに、新たな国際協力の扉が開かれたように思えた。